
彼女とやかんと時々義兄さん

春野天使

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

彼女とやかんと時々義兄さん

【Nコード】

N7494D

【作者名】

春野天使

【あらすじ】

深夜の繁華街、突然目の前に現れた美少女。彼女は悲痛な眼差しで僕を見つめ、兄さんを助けて欲しいと懇願した。不信感を抱きつつも、僕は彼女の純真な笑顔に負けて、怪しげなビルの地下室に歩いていく……。

(前書き)

この作品は、グループ小説第十六弾！「視点の変わる小説」参加作品です。「グループ小説」で検索すると、他の先生方の作品を読むことができます。

彼女とやかんと時々義兄さん

「あの……」

飲食店のバイト帰り、深夜の繁華街で、突然誰かが僕のコートの裾を引っ張った。

「何？」

背後から聞こえたのは若い女の声。時間が時間だけに、あくどいキヤッチセールスか、いかげわしい商売の女かと思った。だが、ふり返った視線の先には、銀色に近い金髪の長い髪をたらし、色白の少女が立っていた。困ったような泣きそうな顔をして、頼りない青い瞳を僕に向けている。

え？ 外人？ しかも長いドレスなんか着て、まるで童話に出てきそうな雰囲気綺麗な少女だった。

「お願いがあるんです」

切羽詰まったような表情で、瞳を潤ませる彼女。外人のコスプレ姿で、若い男を騙す。これは、新手のセールスか！ その手には乗らないぞ！

「ちよつと急いでるんで」

僕は少女の手を払い、視線をそらすと、先を急いだ。

「待ってください！」

少女は全速力で走って来て、僕の前に回りこむ。

「お願い！ 私の兄さんを助けて！」

悲痛な声を出しながら、両手を組んで僕を見つめる少女。潤んだ青い瞳から大粒の涙が流れる。こんな状況で、幼気な美少女を残して去って行くことなど出来るわけではない。男なら誰だってそうだ。下心など全くない、と言えば嘘になるけれど……だから、男は騙される。

「君、誰？ 名前は？」

「私の名前はララル。ある国を逃げ出し、この国に辿り着きました」

随分遠くまで逃げて来たもんだ。ラルルという、どこか子守歌を連想させるような名前の少女は、僕を見つめるとニッコリと笑った。その愛らしい笑顔は、僕を魔法にかける。それは、ラルルの言うことなら、何でもします！ 例え命を奪われても！ という気持ちにさせられる笑顔だった。

「で、君の兄さんは今どこにいるの？」

もし、チンピラかヤクザに拉致されてしまったのなら、僕一人の力ではどうする事も出来ない。まずは、警察に連絡した方が良さそうだ。

「兄さんのいる場所は分かってます。とにかく、私と一緒に来て下さい」

ポケットからケータイを取り出そうとした僕の手を引っ張り、ラルルは暗い路地を歩き始める。え？ 何だよ、やっぱ、いかがわしいキャッチセールス……？ 不信感が沸き始めた僕に、ラルルは今までのいきさつを話し始めた。

彼女の話によると、ラルルの兄、カーンは、ある国のやかん製造工場で働いていたらしい。あのアルミの昔ながらのやかんが、ラルルの国にもあるのか……？ それより、ラルル、バリバリ日本語話してるし……。頭の中にたくさん疑問符が浮かび出した時、ラルルは慌てて、『やかん』じゃなくて、『ランプ』です、と訂正した。で、ある時、テュルルという上司が銀色のやかん（ランプ）を作り始めた。それは彼の部下の一人、ジョニーの結婚のお祝い品だから……とにかく、必死で作らあげ、見事なやかん（ランプ）が出来上がった。そこまでは良かったが、テュルルがやかんの仕上がり具合を確かめるため、試作品の『銀色のやかん（ランプ）』に水を入れて火にかけ、沸騰させてしまったらしい。

「事件はそこから始まったんです」

ラルルは、大きな瞳に涙をいっぱいためて僕を見あげた。

「カーンが、私の大好きな兄さんが……沸騰したやかんに触ってしまったんです！」

沸騰したやかんに触った？ それで、大やけどをしたとか……？
っていうか、ラルルはさっきからずっと『やかん』って言っている。そのたびに、僕は（ランプ）って訂正してるんですけど……。
「……で？」

ラルルが話しの続きを言わないんで、僕は聞き返した。

「だから、兄さんを助けてください！」

「はあ？」

ラルルに手を引っ張られて歩いて来た僕は、いつの間にかある雑居ビルの地下に連れて来られていた。薄汚れた暗いビルの地下。何にもない部屋の隅に、錆び付いたガスレンジだけが置かれていた。なんだここは！？ マジやばい！ 今にもどこから人相の悪いヤクザが現れるんじゃないかと思い、僕の全身から血の気が失せた。恐怖で震える僕を後目に、ラルルはいつの間にか『銀色のやかん』（もう、ランプとは訂正しないぞ）を取りだし、レンジの上へのせて火をつけた。

何だよ、この子……！ いかれてる？ もしかして僕を兄さんと同じ目に合わせようっていうんじゃない？ じきに『やかん』は沸騰し、白い湯気を吐き出し始めた。

「ごめんなさい！ あなたには何の罪もありません！」

ラルルは僕に近寄ると、スツと僕の手を両手で掴み、持ち上げた。

「でも、私、私、カーン兄さんを救いたいです！」

「何だよ！ ワーツ！！！」

大粒の涙を流しながら、ラルルは僕の手を沸騰した『やかん』に近づけた。僕の顔は恐怖でひきつる。やっぱ騙された！ こんな所で死にたくなんかない！

シュルシュルシュル！ 手のひらに強烈な痛みを感じた後、僕の世界は真っ暗になった。僕は死んだのか？ ここは地獄か！？

一面真っ暗な音のない世界。と、頭上に一つだけ小さな穴が見え、その穴の上から誰かの視線を感じた。

「ごめんなさい！」

よく見ると、巨大な青い瞳が覗いていた。声は間違いなく、ラルルの声だ。何で、ラルルがあんな所に？ しかも、あんなにできなくなつて。

「でも、ありがとう！ お陰でカーンは助かりました」

「……はあ？」

「君には感謝するよ。真つ暗な世界から救つてくれて、本当にありがとう」

若い男の声がした。どうやら、ラルルの兄さんは助かったらしい……けど、何故！

「沸騰した『やかん』に触ると、『やかん』の中に閉じこめられてしまふんです。だから、カーンはずっと『やかん』の中に閉じこめられたまま出て来れなくて……」

「君がいなければ、私は一生『やかん』の中で暮らさなきゃならなかった」

「良かった、兄さん！ 私、もう二度と兄さんに会えないじゃないかと思つた」

「ラルル！」

上の世界で、仲の良い兄と妹がしっかりと抱き合い、喜びを分かち合っている様子がかげえた。良かった、良かった。僕もたまには良いことするよなあ……。

「……ちよつと待て！」

靴音を響かせて部屋を出ていこうとする兄妹に気づき、僕はようやく我に返つた。

「僕はどうなる！ 麗しき兄妹愛はいいが、僕は一生この暗い『やかん』の中で暮らさなきゃならないって訳か！」

靴音がピタリと止まり、長い沈黙が流れる……。

「……一度『やかん』の中に閉じこめられてしまうと、代わりに新しい住人を連れて来ない限り、二度と外には出られないんだよ」

「何だと！ お前等、僕を騙したのか！ 自分等兄妹が助かりさえすれば、他人はどうなつたっていいって訳かよ！」

僕は声を限りに泣き叫んだ。一生ここから出られないなんて、そんなの死んだも同然じゃないか！

「カーン、兄さん……」

しばらくして、ララルの泣きそうな声が聞こえた。

「ちよつとかわいそうだわ」

やっぱり、ララルは優しい子だ。怒鳴り過ぎたかな？ や、待て、

「ちよつと」かわいそうって言ったよな……。

「東洋人の彼、ちよつと素敵だった」

また、「ちよつと」って……。僕がやきもきしてると、ララルのはにかむような声が続いた。

「私、ちよつと彼の事好きになつたみたいなの」

え？

「恋ってこんな感じかしら？」

「ララル……」

カーンの困つたような声の後、また長い沈黙が続いた。あんな綺麗な少女に恋されるなんて、悪い気はしない。だが、どうするつもりだ。人を『やかん』に閉じこめといて。

「分かつたよ、ララル」

何かを決意したようなカーンの低い声が響いた後、コツコツという靴音が近づいて来た。カチツという音がして、その後下の方ではおつと燃えるような音がした。

「お前は彼と結婚すればいい……」

はあ？ 『結婚』？ 今確か、結婚って言ったよな。

「兄さん、じゃあ、兄さんはどうなるの？」

「私はまた『やかん』の中に戻るよ……」

「えっ！？ そんなの嫌よ！ 兄さんがいなくなってしまうなんて！」

何だか分からないまま、揉めている兄妹。その間にも、僕の下の方でグラグラと音がして、シューシューと水が沸騰し始めるのを感じた。『やかん』の中にいる時には、不思議と熱さは感じない。

「私はいなくなったりしないよ。この『銀色のやかん』の中にもいる」

「兄さん！」

ラルルがカーンに走り寄って、抱きしめる音が聞こえた。

「行っちゃ嫌！」

「ラルル、私に良い考えがあるんだ。長い間『やかん』の中にいて思いついたんだが、お前達は『銀色のやかん』で商売を始めればいい」

「商売？」

「結婚したら、生活費は必要だろう。『やかん』占いと称して人を呼び寄せればいいんだ。占いをしている間、その人間は『やかん』の中に入る。その間、僕は外の世界に出られるって訳さ。『やかん』の中に入るスリルを味わえるし、占いしてもらえる、まさに一石二鳥な話だろう」

……うん、なるほど。良いアイデアだ！ 考えたね、カーン義兄さん！ あ、今、思わず義兄さんって言ってしまった。けど、実際そうなる訳だ。美少女の妻ももらって、こんな美味しい商売が出来るとは。絶対、今のバイトよりいいぞ！

「でも、兄さん、私、占いなんて出来ない……」

「僕が出来るよ！」

ラルルの心配そうな声を聞き、僕はやかんの中から叫んでいた。

何だか、明るい未来が見えてきたぜ！ フリーター人生とも縁が切れそうだ。今の僕の頭の中は、沸騰しかけの『やかん』と同じ、ハイテンションだ！

「君のために勉強して占い師になってみせる！」

「決まりだな」

落ち着いたカーンの声。沸騰する『銀色のやかん』！

シウルシウルシウル〜！

気付いた時、僕は元通り薄暗い部屋の中にいた。目の前には『銀色のやかん』。カーン義兄さんには結局会えなかったけど、早く会

つてみたいよ。ラルルがニコリと微笑んで、僕を見上げた。一晩のうち、こんなに綺麗な妻と美味しい仕事をゲット出来るなんて、僕は世界一の幸せものだ。

「ラルル！ 幸せになろうな」

僕は両腕で、カ一杯ラルルの体を抱きしめた。

と言うわけで、僕とラルルは間もなく結婚し、『やかん占い』の商売を始めた。いかがわしい繁華街の片隅に掲げた『やかん占い』の看板。お客は結構集まった。現実世界にうんざりし、ファンタジーな世界に憧れる人間は結構いるものだ。

お陰で、カイン義兄さんは、しょっちゅう『やかん』の外に出ることが出来た。ラルルも幸せそうだ。新婚生活も商売も順調。ラルルは、今、妊娠中で、もうすぐ僕はパパになる。結婚後、ラルルが十四才だと聞いて、かなり衝撃を受けたが、彼らの世界では十四、五で結婚するのは普通だとか……。なんとと言っても女王様がいる世界のことだから。もちろん、こっちの世界では親兄弟、友人達にも結婚のことは内緒だ。まあ、正式な結婚をした訳じゃない（十四才の少女とは出来ないし……）

それにしても、カインとラルルの兄妹、やたらと仲が良い。夫の僕が妬げるほど、外の世界に出ている時は、いつもベツタリと寄り添って共に行動している。僕は日々、占いの勉強をしてるっていうのに……。

ラルルのお腹の子、本当に僕の赤ちゃんだよ……？ もし、純粹な混じりけのない白人の赤ちゃんが産まれたらどうしよう……。

「カイン！」

「ラルル！」

今夜も再会した二人は、抱き合って喜んでいる。昨日も会ったばかりだろ……。彼らを気にしつつ、僕は占いの本を片手に、適当な文句を頭の中で考える。

あなたの目の前には、真っ暗な闇の世界が広がっています。けれど、小さな穴から光が差し、あなたは救われるでしょう……。勉強している割りに、僕はいつもお客に同じ文句を言っている。けれど、お客は皆、大感激して去って行く。外の世界に戻った時のあの喜びは、真っ暗な世界を体験した者にしか分からないだろうからな。

了

(後書き)

読んで下さってありがとうございます！どこかで聞いたようなタイトル：かなり強引な展開もありましたが^^;、なんとか「第十六弾」を終了させることが出来ました！
今回、参加された皆さん、ありがとうございます！参加者の方々の作品は以下の通りです。

強引なランプ (N1277D) / 南風 十羽先生

女王様の側近の日常 (N1420D) / 聖 美麗先生

心は今もあの人の元に。(N3335D) / KN-T先生

女王様の涙 (N3435D) / 菜乃葉先生

あなたに贈る花 (N3523D) / 菜乃葉先生

俺様とやかん製造工場〜誰の為のやかんなのか〜 (N6989D)
/ 祐里子先生

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7494d/>

彼女とやかんと時々義兄さん

2009年7月1日21時18分発行